



刊行にあたって

近年、歯科医療を取り巻く環境は大きく変化しています。特に少子高齢化が加速するなか、予防に対する意識の高まりから、子どもたちのむし歯は激減しています。その一方で、成人では歯周病罹患者が増加の一途を辿り、いまだ歯の喪失原因の大部分を占めています。更には、高齢化に伴い、いわゆる“難症例”の患者も多くみられます。

日常の歯科診療に目を向けると、欠損補綴の選択肢が拡がり、高額なインプラントやクラウンブリッジなどによる審美補綴治療を希望する患者が増え、多くの歯科医師が日々技術の研鑽に励んでいます。しかしながら、それらの治療は、経済的な負担や生体への侵襲、基礎疾患の有無などの問題から、すべての患者に適応できるわけではありません。つまり、欠損補綴におけるパーシャルデンチャーや総義歯の需要が減ったわけではなく、保険診療においても中心的な治療法であることに変わりはないのです。

とはいえ、パーシャルデンチャーや総義歯治療に必要な知識や技術は、大学の医局等に在籍して専門的に学ばないかぎり身につけません。そして現在、卒後間もない若い歯科医師には研鑽の場がなく、そのままの状態が開業に至り、以降も歯科技工士任せというのが実状のようです。

そこで、本増刊号ではパーシャルデンチャーの臨床にスポットをあて、特に“患者に喜ばれる”という観点から全体を構成しました。具体的には、噛める、話せる、痛くないパーシャルデンチャーの基礎知識や材料、診査・診断・設計・製作方法、患者指導やメンテナンス、そして注意すべきプロブレムリストなど、時代に即した臨床のエッセンスを、各執筆者に示していただきました。更には、ノンメタルクラスデンチャーやインプラントオーバーデンチャーなどの最新材料やテクニックもトピックスとして取り上げ、また付録として切り離して使える“患者説明用ツール”を収載しました。

パーシャルデンチャーの臨床応用は画一的なものではなく、患者の諸条件によってさまざま異なります。本増刊号が、これから本格的にパーシャルデンチャーを学ぼうとする読者諸氏の一助になれば幸いです。

2012年6月
編集委員一同